

想起の構成的側面と保持的側面

福田 敦史（慶應義塾大学）

「過去における自分自身の体験について直接的に思い出す」という想起の場合、想起されている記憶内容は、想起された現在の時点では概念化された「思考(thought)」でなければならない。しかし、この想起内容が、過去の体験の時点において、すでに概念化され思考となっていたのでなければならないわけではない。想起においては、現在において概念化の働きがなされ、思考を獲得するのであり、現在において初めて、過去の自身の事柄についての記憶、というひとつの経験が成立しているのである。想起には、このような現在における構成的な側面があるように思われる。したがって、想起経験における保持的側面について考えてみるならば、想起において保持されているものは、思考や知識そのものではないということになる。想起の場合、保持されているものは、概念化されていない「情報状態(informational state)」といったものなのである。

大森荘蔵が指摘するように、痛みの想起には痛みが伴わないのであるから、痛かった知覚経験そのものが保持され再現されるのではない。私たちは保持されている情報状態に基づき、現在において「私はあの時足が痛かった」という自己意識的な「私 思考(I-thought)」を構成可能でなければならない。また、その時ならば「自分の足が痛い」という「私 思考」を持つことが可能でなければならない(しかし「私 思考」を保持するわけではない)。情報とは、痛みや美味しさといったものを含めた単に感覚的・直観的なものではなく、かといって、概念化された思考や知識というものでもなく、いまだ概念化されていない「非概念的 content(non-conceptual content)」といったものとなる。

さらに、今、思い出されている記憶内容が過去に実際にあったことである、という過去性ないし過去の実在性に関しては、想起された記憶内容のどこかに見いだすことができるものではなく、また、保持されている情報の内に見いだすべきものでもなく、私たちの経験を成立させる概念一般の能力や、私たちが有している客観性や実在性といった概念と関連づけて考えられなければならない。つまり、保持されてきた情報に基づいて概念能力が行使される、という想起の保持的側面と構成的側面との共働によって、想起された内容の中にはなく、想起された内容について過去性というものが構成されるのである。